～競馬報道に性差はあるのか～

～Is there gender bias in the coverage of horse racing?～

1K10C423　宮下雅史
主査 リー・トンプソン　先生　　副査　寒川恒夫 先生

【目的】

『メディアスポーツ解体＜みえない権力＞をあぶり出す』の著者である森田浩之は著書の中で様々な国のメディアが女性スポーツを描く際にファストネームで呼ぶ機会が増える事や、アスリートの外見やセクシーさに注目する「幼児化」「性愛化」、男性アスリートに比べて報道される量、時間が少なくなる事や、大きく報道されるのは「女性に適した」ものになる業績の「周縁化」、女性アスリートの業績を様々な形で小さく見せる「矮小化」が起きていると著書の中で語っている。

私は上記の「周縁化」と「矮小化」に焦点をあて人間の「周縁化」と「矮小化」が競馬には投影されているのかを検証するために以下の二つの仮説を立て考察していく。

1,上記の女性スポーツの「周縁化」から下記研究方法内の期間に牡馬、牝馬の記事数、記事量、平均ページ数を比較していく。その中でレースに出走し勝った競走馬が記事になる確率が高いため絶対数の多い牡馬の方が記事数、記事量においては牝馬を上回ると仮定する。しかし反対に記事になる確率が牡馬の方が高いため平均ページ数においては牡馬と牝馬では差がないと仮定する。そして競馬においては人間の「周縁化」は競走馬の絶対数の差が原因であるので投影されていない。

２,上記の女性スポーツの「矮小化」から下記研究方法内のポジティブワード、ネガティブワードの比率を比較するとした場合、牡馬の方が強さ、たくましさに勝る傾向にある事から牡馬の方が牝馬よりもポジティブに報道される。そのため人間の「矮小化」は競走馬に投影されていると仮定する。

【方法】

今回の研究では媒体を日本中央競馬会が発行している機関誌『優駿』を研究媒体とする。

そして仮説１を検証するために日本中央競馬会の売り上げが落ち始めた１９９７年１月から２０１２年１２月までの期間中、１９９７年１月から１９９８年１２月、２００５年１月から２００７年１２月の記事数､記事量、平均ページ数の項目を調査する。

その中で以下の基準を設定する。

① 記事内において複数の競走馬が登場する場合は記事の主体の競走馬のみカウントする。
② また同一レース内の記事の場合でも別に見出しや写真を掲載し記事の分離を行っている物は一つの記事としてカウントする。
③ 同じ月に複数の同一競走馬の記事が存在する場合は一頭ずつカウントする。
④ 今回は現役の競走馬の記事のみを対象とする。

続けて仮説２を検証するために以下のポジティブ、ネガティブワードを設定する。

＜ポジティブワード＞
凄まじい、完勝、最高、歓喜、良い、素晴らしい、痛快、あっさり、美しい、楽勝、華麗、完璧、強い、理想、誇り、強烈、圧倒的、屈指、優れる、たくましい、タフ、安心、適応力、女王様、大きい、輝く、集中、力強い、自信、盛大、圧巻、昂る、リラックス、楽、頑健、あり得ない、絞る、好感、歓声、爽快、異次元、気合、大胆、魅了、快感、得意、歓迎、究極、落ち着き、頼もしい

＜ネガティブワード＞
不安、リスク、難しさ、完敗、不足、心配、無謀、ため息、少ない、低い、惜敗、最悪、危機、寂しい、慎重、嫌気、早熟、残念、劣る、厳しい、半信半疑、出遅れ、悲痛、緩む、失速、不運、悪夢、賭け、戸惑い、細やか、悪化

上記ワード以外の情報はすべて対象外として特定の１０レースについてコーディングをしていく。
またその際に以下のルールを付け加える。

⑤ 上記①～④に加えて今回対象にする記事は原則レースがあってから最初に『優駿』に記載された物を扱う。

【結果】

上記の研究から得られた情報によると競馬には人間のジェンダーは投影されておらずむしろ力量で評価される傾向にある事がわかった。